Kwansei Gakuin University

『間抜けのウィルソンの悲劇と喜劇あの異形の双子』
——トウェインの時代認識と韜晦

杉　山　直　人

奴隷制社会ドーソンズ・ランディングとミュラトー

「喜劇あの異形の双子」（以下「異形の双子」、引用文後は *TW* と略記）とのかかわりについては最後に考えるとしよう。すると、「間抜けのウィルソンの悲劇」（以下「間抜けのウィルソン」、引用文後 *PW* と略記）はトウェインが途中放棄せずに完成した小説のなかでは、奴隷制と奴隷社会のあり方を多方面から描き出すのに、もっともふさわしい時代背景や人物設定をそなえているのがわかる。

一八三〇年から五〇年代初頭、ミズーリ州ドーソンズ・ランディングは深南部と違って比較的おだやかな奴隷制を維持している。しかも、ロクサナはドリスコル家の家事労働に従事していたから、恵まれた立場だったと言えなくもない。だが奴隷であるかぎり、所有者の気持ちひとつで人生が決まってしまうのは、『ハックルベリ・フィンの冒険』のジムと同じである。ワトソンさんの好意で奴隷の身分を抜け出すことができたジムとは対照的に、ドリスコル氏の奴隷たちは実際に売却されてしまった。同時代の南部を舞台としながらも、前作では次々と起きる冒険や少年との交流の陰に隠れて、ややもするとかすみがちだった川下に売られる恐怖が、「間抜けのウィルソン」では物語り開始後まもなく読者に突きつけられる。冒頭第一ページでドーソンズ・ランディングに漂う牧歌的雰囲気を強調した作家は、わずか数ページのちには、奴隷制社会として、この町がもつ基本的性格を確認するのを忘れない。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「間抜けのウィルソン」にはまた、逃亡奴隷をめぐる旧南部の社会状況も再現されている。手配書を配り、懸賞金を使って逃亡奴隷ロクサナを捕まえようとする白人側の動き、彼女が逃亡中に見せる追いつめられた心理と人目を忍ぶ逃亡生活などは、ハックとジムの冒険を知る読者にはおなじみである。

ただし、一四、五歳の少年ハックではなく、万能の語り手に物語が委ねられているおかげで、前作にはなかった新しい解説までもが付け加えられている。たとえば、奴隷にたいしてヤンキーのプランテーション監督がみせる虐待がそうである。これはロクサナ逃亡への引き金となったが、生粋の南部白人より、移り住んできたヤンキーのほうが黒人に過酷だという認識は、本書第四章の旅行記でも示されていた。トウェインも同感だったのだろう。こうした観察は奴隷社会で暮らし、「よそ者」と黒人とのかかわりをつぶさに知った者にしか得られなかっただろう。ほかにも自分たちを人間として公平に扱わない主人から物をくすねるのは「罪」ではないと考える奴隷たち、また奴隷たちを川下に売らなかったのを美徳と考えて自己陶酔するドリスコルの姿など、いずれも一八六五年を境として否定された文化と、それに取って代わった新しい文化の双方を知り、新しい文化の立場から過去を見つめる者の眼差しが生きている。「間抜けのウィルソン」は『ハックルベリ・フィンの冒険』と違って、白人と黒人の血が流れるミュラトーを主人公とする。この設定がなされたことで、「間抜けのウィルソン」は一八三〇年代から五〇年代にいたる二〇数年ばかりか、南北戦争後の時代をも守備範囲におさめることとなった。ジョージ・ワシントン・ケイブルの『グランディシム一族』と同じように、新旧ふたつの時代と文化を交錯させることとなったのである。『アブロム、アブサロム！』や『行け、モーゼ』でフォークナーが取りあげることになる、血をめぐる両人種のかかわりをクローズアップすることになった。

「どうして白人と黒んぼができたんだろう、黒んぼには誕生の呪いが定まってるなんて、最初の黒んぼは生まれるまえにどんな罪を犯したんだろう、なぜ白人と黒んぼではこんなにひどい違いができてるんだ……けさは黒んぼの運命がなんと厳しいものか、という気がする！昨日の晩まではこんなこと思いもしなかったが」（*PW*

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

四四）——自分の体に流れる「黒人の血」の秘密を知らされ、華やかな上流階級の暮らしを約束されていた奴隷所有者の立場から、急転直下、実は自分が売買可能な商品にすぎぬことを母ロクサナから聞かされたトムのこの言葉は重い。トムの疑問をとおして、「間抜けのウィルソン」は人種とはなにか、なぜ黒人はこれほどひどい暮らしをおくらねばならないのか、白人と黒人はどう違っていて、その違いは「血」とどう関わっているのか、といった社会性の強い問題意識を読者に突きつける。第二次公民権法案成立後半世紀を経たいまも、人種問題を澱（おり）のように沈殿させたアメリカ社会を見るにつけ、トムの慨嘆と苦悩は多くの黒人にとって切実であろう。古くて新しい問題である。だから『ハックルベリ・フィンの冒険』よりも、いっそう現代的な意義をこの作品に見いだしたくなる。ただし、どのような答えが作品に準備されているかは、別問題なのではあるが……。

奴隷制社会の「法」

外観は白人そのものであるロクサナとトムには各々一六分の一と三二分の一の黒人の血が流れている。ドーソンズ・ランディングの「法と慣習の虚構」（*PW* 九）にしたがえば、ふたりは黒人にして奴隷である。ただし本物のトム・ドリスコルと「偽トム」取り替えたロクサナ以外、誰も二人をめぐる血の秘密を知らない。だから、指紋を照合したウィルソンが、トムこそ伯父殺害の真犯人であることを法廷で暴露するまで、トムはドリスコル家の正当な遺産相続人として社会的に認知され、白人としての待遇を受ける。奴隷制共同体を見事にだましつづけた、讃えられるべき母の知恵と、裏をかかれたドーソンズ・ランディングの愚かさは鮮やかなコントラストをなす。ロクサナにたいする作家の喝采が聞こえてきそうである。

血の秘密を知られてしまったトムは、現代からすれば不思議な扱いを受ける。殺人者として収監されていたものが、知事命令によって釈放され、今度は破産したパーシ・ドリスコルに残されていた資産の一部として、債権者の意志によって動産（“chattel”）として売却されるのである。

債権者の理屈はこうだ——パーシ・ドリスコルの財産目録に、トムが奴隷として

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

最初から記入されていれば、パーシの死とともに資産として売却されていただろうから、育ての親たる伯父の判事を殺すことはできなかった。だから、殺人の責任は誤った記載をした目録が負うべきである。トムには資産価値があるのが分かったのだから、その彼を終身収監するのは債権者たるわれわれへの損失だ、と。

債権者のこうした主張にはひとつの誤りがあることを、最近の研究書があらためて指摘している。(Howe 二〇七)。パーシが亡くなるまえに、彼の奴隷ヴァレ・ド・シャンブル（Valet de Chambre）を実はドリスコル判事が買い取っていたことを債権者が無視している、ことである。奴隷売買が権利だった時代にあっても、家事奴隷売買をめぐっては人びとのあいだにためらいがあり、そこで世間体に配慮した判事は気を利かせて、シャンブル（チェンバーズ）を弟から譲り受けた、と物語は語る。(第四章）すると、その時点で「偽トム」は所有権が破産したパーシから判事に移っているわけで、債権者の主張は有効性を失う。ところが、この点を法廷や州知事は言うに及ばず、真犯人を発見して（奴隷制社会とはいえ）「正義の守護者」たる役割を成功裏に果たせたウィルソン自身も気づかなかったか、見逃してしまった。だから債権者の言い分が認められた時点で、奴隷所有者をめぐる法の正義は無視されたことになる。

ただし、トムの売却は「法の正義」の無視というだけにとどまりはしない。むしろ考えるべきは、奴隷としてのトムの属性がひとりの人間としてのトムの犯罪をうやむやにしてしまったことである。殺人を犯しながらも、奴隷であったことが分かったために、その罰を免れるという、奴隷制社会でのみ可能な倫理的倒錯がトムの売却には見られる。外観は白人のトムが奴隷として売られてゆき、そのいっぽうで「黒人の血」が彼を殺人罪から救出するという結末である。しかも、囚人の運命を左右する最終権限をもつのは行政府の最高責任者たる知事だというのだから、物語の結末は論理のすり替えや御都合主義を抱えていた司法ばかりか、行政府のあり方にも皮肉を投げかけていることになる。旧体制にたいするトウェインの苦い笑いである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ふたつの時代——新南部と「黒人の血」

平和で牧歌的、眠ったように心地よい表向きの顔を持つ一八三〇年代のドーソンズ・ランディングの描写で始まった「間抜けのウィルソン」は、五〇年代の隷制社会の倒錯ぶりを暴きたてて終わっている。ただし、物語が一八五〇年代で完結してしまうわけではないことは、すでに触れた。奴隷制社会と再建期以後の新南部とのオーバーラップ、時代背景の二重性である。外観は白人であるミュラトーを法のなかにどう位置づけるかについて、ドーソンズ・ランディングと作品が実際に執筆された一八九〇年の南部とは重なりあう。人種問題をめぐって、新旧両時代の南部が見せる、変わることのない保守性が浮き彫りになる。

最近のバーバラ・ラッド（Barbara Ladd 一一七～一一八）の研究によれば、ルイジアナ州は一八九二年に人種区分を南北戦争前よりはるかに厳しくした法律をつくったという。州の調査で黒人の血が流れる先祖を持つことがわかった人はすべて黒人扱いとなった。南北戦争以前はどうだったかというと、ほかの南部の多くの州と同じように四分の一以下の黒人の血しか持たない人は、少なくとも法的には白人扱いだった。再建期以後、南北戦争以前よりも強固な白人優位体制が根付いてしまった。白人と非白人、とくに黒人との交わりをタブーとする土壌ができあがったのである。こうした法律は、先にケイブルを扱った章で論じた八十年代のセグリゲーションへの傾斜が本格化しつつあった、ひとつの証である。

『間抜けのウィルソンと異形の双子』はオリジナル草稿が一八九二年十二月から翌九三年一月にかけて完成したことがわかっている。おなじ頃、「黒人の血」をめぐってトウェインの創作的想像力を刺激したに違いない事件がルイジアナで起きていた。エリック J. サンドキスト（Eric J. Sundquist）が言及する（*Race, Conflict and Culture* 四七～五二）、プレッシ対ファーガソン裁判（Plessy v. Ferguson）である。事件は一八九二年六月、八分の一だけ黒人の血が流れる三四歳のホーマ・A・プレッシ（Homer A. Plessy）が、ルイジアナ州で鉄道の黒人専用車に乗車するのを拒否して逮捕された、というものである。白人専用車に乗車し、座席に座ったプレッシは自ら直ちに車掌に申し出て、逮捕された。一八九〇年にルイジアナ州が制

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

定した「別車輌法」（“Separate Car Act”）違反に問われるように自ら仕向けたのである。一〇年前にアラバマでケイブルが経験した列車での人種分離乗車が、南部諸州で合法的に確立されていった過程でこの事件は起きている。

「別車輌法」には反発した黒人も多かったようで、彼らも手をこまねいていたわけではなかった。プレッシの行動も偶発的ではなく、逮捕自体が計画的だった。この計画には背後に黒人組織があり、ノースキャロライナで判事をしていたカーペット・バガーの作家アルビオン・トゥルジェ（Albion Tourgee）なども加わっていた。前年の一八九一年、ルイジアナ州の黒人有志は委員会を設け、三〇〇〇ドルの資金を集めて抗議行動への準備を進めていたのである。すべては組織的行動だった。彼らは「別車輌法」が憲法、特に補正第一四条（第一章で解説済み）違反であることを訴えようとした。補正第一四条によれば、アメリカ市民の権利をめぐっては、連邦政府権限が州権に優越する。だから「別車輌法」はアメリカ市民の享受する「合衆国の法の支配のもとでの平等」に反するのではないか、と黒人たちは考えた。裁判を起こして世論に訴えることが目的だったから、プレッシが白人専用車で逮捕される必要があったことになる。（*http://crm.cr.ups.gov/archive/19-21/19-2-4.pdf, Microsoft Encarta 2001, The Reader's Companion to American History*）

法廷でのプレッシの主張（サンドキストによると、実はトゥルジェが授けた論法らしい）は二点あり、一、「別車輌法」は憲法違反である、二、自分には八分の七も白人の血が流れているのだから、白人専用車に乗車する資格がある、とするものだった。プレッシは白人として通用するほど肌が白く、立ち居振る舞いや服装も恥ずかしいものではなかった、という。だからそのぶんだけ、この法律のバカバカしさを際だたせることにはなったが、ルイジアナの法廷は州法を支持。敗れたプレッシは上訴請求をおこない、最終的には最高裁まで持ち込み、四年後の一八九六年に至って結審にこぎ着けた――七対一の大差で原告敗訴だった。最高裁は「別車輌法」が合憲であるとの判決を下したのである。以後、鉄道ばかりか、学校、病院などでも人種に基づく分離が大手を振ってまかりとおるようになる。「分離すれども平等」という南部に都合のよい（今から振り返ると）詭弁にすぎない主張に、最高裁がお

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

墨付きを与えてしまった。世界中からアメリカの恥部として批判を受けた南部の制度を廃止しようとする動きが本格化するのは、半世紀以上のちの一九五四年、公立学校における人種分離は憲違だとする有名なブラウン判決が下されてからのことだった—すでに触れたとおりである。

最高裁判決がどのような根拠に基づいて下されたか、多数派意見をまとめておこう。代表して判決文をしたためたのは、ヘンリー・B・ブラウン（Henry B. Brown）判事だった。原告の最初の争点—「別車輌法」は奴隷制を禁じた補正第一三条に違反するのではないか—にたいし、憲法違反でないのは「議論する必要もないほど明快」だと判事は言う。奴隷状態とは「不本意な隷属——強制労役状態」を意味し、人間を動産として所有することなのだから、二つの人種を別々の列車、もしくは仕切られた同一車輌に分離乗車させても、なんら抵触するところがない。誰を客としてもてなすか、自分の馬車や車に誰を乗せるか、劇場やコンサートに誰を入れるかなどについてなされる、適当と思われる分け隔て（discrimination）をめぐって、いちいち奴隷制の議論を持ち出すのは、行き過ぎだというブラッドレー判事の意見が判決文中に引用されている。

興味深いのは、「別車輌法」が補正第十四条にも抵触しないとの解釈が紹介される件（くだり）である。いわく、補正は「法のまえでの二人種の絶対的平等」を施行するのを目的とはしている。だが、「本来（“in nature of things”）、（補正は）肌の色に基づいた分け隔て（“distinctions”）を廃止するよう意図されたことも、また政治的平等とは区別される社会的平等、あるいはどちらかにとって不満足な条件での二人種の混じり合い（“commingling”）を施行するよう意図されたはずがなかった。二人種が接触しがちな場所で、二人種の分離を認めたり要求する法律は、かならずしも一方の人種が他方にたいして劣ることを意味するものではなく、普遍的ではないにしても一般的に州議会が警察権を行使する際の法的権限に含まれる」というのである。（*http://www.augustana.edu/Users/Podehnel/101/Plessy.doc*）

判決文が語る「政治的平等」といい、「社会的平等」といい、ふたつはいずれも先のケイブルが解放民にも認められるべきであると主張したアメリカ市民としての権

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

利のなかに含まれる。ふたつはケイブル自身の言葉を使うと、「市民的関係」（“civil relations”）において肌の色に関係なくアメリカ市民すべてが所有すべき権利である。プライベートな個人レベルの関係ではなく、社会における公的な、したがって無機的な相互関係のなかで、アメリカ市民が等しく共有すべき公権である。だが、プレッシ対ファーガソン裁判において、アメリカ最高裁は公式にケイブルのような考え方を退けた。

判決文では争点をめぐるほんとうの議論は実は行われていない。判決は一種の門前払い、議論の棚上げ、あるいは穏やかに言っても一種の循環論法である。肝心の「別車輌法」が合憲であることを示す法的根拠は見あたらないから。あるのはただ、人種分離は差別でなく、これまでも慣習としてあったから違憲ではないという話である。実際、この判決文のなかでブラウン判事は、自分の出身州であるマサチューセッツ州が一八四九年に合憲と判断した、ボストンの公立学校における人種分離を間接的に引き合いに出している。黒人の政治的権利が真摯に施行されてきた、かのマサチューセッツ州でも人種分離はあったのだから、今回の裁判で社会的平等を求める黒人側の主張には無理がある、という論法である。マサチューセッツにおける公立学校の人種分離が正当とされたのが、実は南北戦争前の話だったことは触れられていない。だから半世紀近くまえの司法判断が踏襲されたことになる。時代錯誤という他あるまい。

トムの運命を考えるとき、判決文でもうひとつ興味を引く記述がある。いったいどれだけ黒人の血が混じれば、法的に「黒人」と見なされるのか、という問題である。これについても最高裁は判断を避ける。いわく、各州によって意見の相違があり、「わずかでも黒人の血がそれとわかるほどに混じっていれば」（“any visible admixture of black blood”）黒人だ、と判断する州もあれば、黒人の血が白人の血を圧倒しているかどうかによる、とする州、さらには白人の血が四分の三以下であれば黒人である、とする州まで多岐にわたる。したがって、この問題は各州の法律のもとで定められるべきで、プレッシ裁判の法廷にはふさわしくない、と。要するに、ここでも門前払いが繰り返された。判決文は最後に、原告の申し立てをめぐっ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ては、まずルイジアナ州の法律の下で原告プレッシが白人であるか、colored race であるかが重要問題であると結んでいる。一九世紀末のアメリカ社会にあってミュラトーは、彼らが暮らしている州によって「白人」となったり「黒人」となった。彼らの人種的アイデンティテイはトムと同じように人工的につくられていたのである。

旧南部におけるミュラトーの運命

一八九〇年代の南部から目を転じて南北戦争に至る数十年間の時期、つまり「間抜けのウィルソン」の背景となった時代に南部がミュラトーをどう捉え、南部社会における彼らの地位がどう変化していったかをまとめておく。

一九八〇年刊ジョーエル・ウィリアムソン著（Joel Williamson）『新しい人びと――アメリカにおける白人・黒人人種混交とミュラトー』（*New People : Miscegenation and mulattoes in the United States*）によれば、一八五〇年代に奴隷たちのなかで、ミュラトーの占める割合は徐々に高くなっていったという。一八五〇年と一八六〇年の国税調査比較に基づく数字を挙げてみよう。この一〇年のあいだに、黒人奴隷の増加が二〇パーセント弱だったのにたいし、ミュラトーは六七パーセント増えている。明らかにミュラトーとわかる奴隷の数は二四万七千人から四一万二人に増加。当然、奴隷総数に占めるミュラトーの割合も七・七パーセントから一〇・四パーセントへと増加した。白人と黒人の混血は進みつつあった、あるいは白人の血が流れる「黒人」の数は着実に増えていたのである。（Williamson 六三）

こうしてミュラトー奴隷は南部社会で存在感を増していったが、人びとは奴隷の身分だったミュラトーについては実は無頓着だったという。問題は、「自由黒人」の範疇に含まれることになる非奴隷ミュラトーにたいする、白人たちの反発や敵意が五〇年代になって際立つようになったことである。ウィリアムソンの言葉を借りると「この一〇年間、それまでになかったほどの激しさで白人たちは南部の自由ミュラトーたちを攻撃した。」（Williamson 六五）

ロクサナとおなじように一六分の一の黒人の血が流れるミュラトーにたいし、どのような考え方がこの時期に南部で表明されたか紹介しておく。南部本流を自認す

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

るヴァージニアは、法律的にはそれまで彼らを白人扱いしていた。だが、人間の平等を高らかにうたいあげた独立宣言起草者トマス・ジェファソンのお膝元シャーロッツビルで、皮肉にもミュラトーの権利を保護するこうした法律に異議を唱える新聞編集者があったという。つまり、少しでも黒人の血が混じっていれば、黒人的な肉体的特徴がどこかに現れるのだから、いかに白人の血の割合が増えようとも、混血の事実はぬぐい去ることはできないではないか、と主張したという。

比較的豊かな自由ミュラトーを多く抱えたサウス・キャロライナやルイジアナは、後述するように南部が奴隷制をめぐって硬直化してゆく三〇年代以降も、彼らにまずは寛容だった。だが五〇年代になると、自由ミュラトーを排斥しようとする動きが活発化する。特にサウス・キャロライナでは、資産を持たない自由黒人はすべて追放するように州知事が議会に求めた、という。(Williamson 六六) ルイジアナでも事情は変わらず、五〇年代後半になって、自由黒人を州から追放しようとするリンチ集団が生まれた。社会的な地位ばかりか、自由ミュラトーの存在そのものをも抹殺しようとするこうした五〇年代南部の歴史的な動きは、人から物へと転落させられてゆくトムの姿と重なりあってゆくのである。

南北戦争直前の南部は「緊張し不安で疲れ切った社会だった」(Williamson 七四)。社会基盤たる奴隷制への脅威を直接感じ始めていた南部は、恐怖と不安に打ち勝つために厳格な秩序と強力なリーダーシップを求めた。社会の構成員には体制の維持と繁栄のために忠誠が求められ、指導層を批判したり異論を差し挟む自由は失われつつあった。社会や政治をめぐる議論は単純化され、体制の統一原理に反したり、疑問を投げかけるような考え方や、明瞭な分類法に納まりきらない人びとの存在は危険視されだした。外観が白人のミュラトーはまさにそうした人びとだったのである。

一八五四年にジョージ・フィッツフュー (George Fitzhugh) が発表した『南部のための社会学、もしくは自由社会の失敗』(*Sociology For The South, Or The Failure of Free Society*) を読むと、やみくもに奴隷制を擁護しなければならない、追いつめられた南部の焦りが感じとれる。いわく、なるほど北部には南部の奴隷制

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

はない。確かに「自由社会」ではあろう。だが、その「自由社会」を支える原理は「レッセフェール」、すなわち弱肉強食の論理である。競争に勝ち抜いた強者たる資本家だけが繁栄を謳歌できる社会である。自己利益追求に急な彼らは労働者を搾取し、貧しい者はますます困窮化する。階級が対立して相互に反目し、憎悪と嫉妬が支配する北部にキリスト教的相互扶助の精神は育たない。いったい、ほんとうの意味での人間的な社会が北部にあるのか——資本主義勃興期の北部社会における労使問題を極大化し、劣悪な環境で長時間労働を余儀なくされる都市労働者を、新しい「奴隷」ととらえた論調である。当時の北部労働者が一般に置かれていた状況からすれば、一定の説得性をもったかもしれない。

自由社会の対極には南部奴隷制社会がある。プランテーションには家族主義（パターナリズム）にのっとった強者と弱者の協力関係がある。黒人は奴隷としてプランテーションで働き、その代償にプランターは黒人や家族の面倒をみる。奴隷制のもと、奴隷とプランターは人間的共同体を構成する。プランターが資本と技術を提供するいっぽう、奴隷は労働を提供して互いに必要とするものを分け合う。これこそ、キリスト教的互助愛の精神に基づいた理想的社会ではないか、云々。

南部社会が黒人奴隷にとっての「最善の社会形態」（Fitzhugh 一六二）だと理想化されてゆく過程で、白人はパターナリズムにのっとった黒人の庇護者として、いっぽう黒人は奴隷として人が良くてプランターに忠実、そのかわりに知能が低い「子供」や「サンボ」であることが求められるようになる。ステロタイプ化された両人種の役割ができあがってしまう。これこそが南部の「期待する人種像」だったが、ミュラトーは「期待される人間像」のなかにおさまりきらなかった。外観は白人と違わない場合もあるミュラトーは、曖昧であるがゆえに許容できない存在となった。そうした人びとの存在自体を南部は認めることができなくなりつつあった。南部社会を構成するのは、白人か黒人（奴隷）かのいずれかでなければならなくなった。外部世界にたいし、賛美に満ちた言葉で南部が自らを規定する必要が切実となった五〇年代には、それまで一定の地位を得ていた自由ミュラトーをさえも、白人か黒人（奴隷）かの二項対立のなかでの位置づけようとするようになった。トムが売ら

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

れていったのと同じように、彼らは白人社会から締め出されていったのである。

一八三〇年～五〇年頃という時代を設定し、その時代を背景にトムの転落を描きだしたトウェインの筆には確かな時代認識、歴史感覚がうかがえよう。ミュラトーをめぐって一八九〇年代の新南部と南北戦争直前の旧南部を絡ませあった作家は、半世紀にわたって基本的に変わらなかった南部の姿をトムの運命に書き込むことに成功している。

トムと「黒人の血」

作品の外側からミュラトーをめぐる新旧両南部の歴史的動きを概観した。では、作品のなかではミュラトーをミュラトーたらしめている「黒人の血」を作家はどう扱っているのか。最初に、偽トムと同じ日に生まれた本物のトム（便宜上、以下「チェンバーズ」）がどのように成長していったかを跡づけておこう。彼こそは百パーセント白人の血が流れる正当相続人にして、かつドーソンズ・ランディングが共同体の指導層に求める条件をすべて備えた存在として、この世に生を受けたからである。幼い頃のチェンバーズはトムを圧倒する。体格、力、賢さ、任務遂行力、いずれも優れている。嫉妬が原因となったトムの本物いじめがエスカレートしていくほどである。成長過程ではこうして素晴らしい能力を発揮したチェンバーズだが、長じてからは生まれながらの力量を抑制することになる。最初は主（あるじ）の理不尽さに怒り反抗したチェンバーズだったが、やがては抵抗をやめ、いじめにあっても耐えることを体得し、偽物の執拗な嫌がらせや無理難題にも応じるようになる。そうしたほうが安全で自らの利益にかなうからである。これは環境への見事な適応であり、奴隷制の元での生き残りを賭けた生活の知恵だった。それだけが彼の命を助けることができたのである。だが、チェンバーズにとってそれは幸せなことだっただろうか。

偽トムが逮捕されたあとのチェンバーズの暮らしぶりは奴隷制社会の恐ろしさと滑稽さを彷彿させる。唾棄すべき主は姿を消し、自らのしかるべき地位を回復されたのちも、チェンバーズは「奴隷」たることをやめられない――「歩きぶり、態度、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

しぐさ、ふるまい、笑い方――すべてが下品で粗野だった。」（*PW* 一一四）二〇年間を奴隷として暮らしたために過去の生活習慣を改めることができず、白人との付き合いに恐怖を感じる。だが、もはや黒人たちとかつてのように共に暮らすこともかなわない。二つの人種のいずれにもたいしても違和感や疎外感にさいなまれ、宙ぶらりん状態で暮らさねばならない。アイデンティテイの喪失である。こうしたチェンバーズの姿は、偽トムをしばらくのあいだでも苦しめることになった「黒人」と「白人」の違いとはなにか、という疑問へのヒントとなる。つまり双方の違いは実は社会的、後天的にできあがったものだということである。奴隷社会という枠組みのなかで、一定の規則や価値観を遵守しながら長年暮らすあいだに、人工的に作られたものなのである。南北戦争をまえにした南部社会が白人か黒人（奴隷）かの二項対立のなかに、その構成員を納めきろうとしたことはすでに触れたが、チェンバーズは期待される「黒人（奴隷）」たることを演じ続けるうちに白い「奴隷」となってしまった。「奴隷」とは要するに社会的に訓練され、学習された結果として生まれた行動様式の寄せ集めにすぎない。

「訓練がすべて」とはウィルソン・カレンダーの有名な一句である。人間は生まれ、遺伝、人との付き合いなど外的影響力に反応する機械にすぎない、と晩年に発表された「人間とはなにか」のなかで老人は喝破する。単純化された環境決定論に基づく人間観だが、「間抜けのウィルソン」でも環境に支配された人間は数多い。「黒人奴隷」たることを演じるうちに、ほんとうに奴隷としての属性が身についたチェンバーズと同じように、血と家系をめぐるロクサナの思考も奴隷社会の人種観に縛られている。自分を蹴っ飛ばしたルイージに決闘を挑みもせず、裁判に訴えて面目を失墜したトムを彼女は臆病者呼ばわりする。こうした彼女の反応は、ロクサナと対極の立場にある奴隷所有者たるドリスコル判事やハワードと変わらない。彼女によれば、わずか三二分の一の黒人の血のせいで、トムはだらしない卑怯者に堕している、という。（一四章）今のわれわれの目からすれば、彼女自身がレーシスト的発想に取り込まれているのがわかるのである。

トムの父はセシル・エセックスである。人びとの尊敬を集める FFV（the first

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

family or families of Virginia）の優秀な家柄ということになっていて、ロクサナは既に他界した彼をたいそう誇りにしている。どうやら彼女はこの白人男性にひどい目に遭わされたというよりも、むしろ可愛がられたのであろう。怒りや恨みを口にすることはなく、ひょっとすると今でも愛情さえ感じているのではないか。そうでなければ、奴隷社会のあり方に怒りとやりきれなさを感じ、わが子を取り替えるという大胆きわまりない行動によって体制への反逆者となりながらも、どうして支配者たる白人の人種的価値観をロクサナがそのまま受け入れているのか、説明がつくまい。先祖をさかのぼれば共和国成立神話の原点たるジョン・スミスやポカホンタスにまで自分の血筋はつながっていると本気である。血と家系にたいするFFVとロクサナのこだわりは、人種の違いを超えて表裏一体である。FFVがそれ以外の白人に抱く排他的特権意識はそのままロクサナの心を支配している。二つの人種の峻別を土台とし、貴族的ヒエラルキーに支配された共同体に瀰漫するレーシズムを、誰あろう、その社会の被害者たるロクサナ自身が取り込んでしまっている。日々繰り返される共同体の言説がなせる技である。

ロクサナのいうように、「黒人の血」が体を流れているためにトムは決闘を怖がるような「臆病者」になったのだろうか。彼のだらしない暮らしぶりもまた「黒人の血」になんらかの形で影響されているのだろうか――トムの生い立ちを追っても直接の答えは示されない。

物語の舞台から退場するまでのトムの足跡のなかで、彼の先天的性格が浮き彫りにされるのはどの時期かというと、生まれた直後から少年時代までを扱った第四章が中心である。具体的なエピソードがいろいろ紹介される。欲しいものがあると泣きわめく、気に入らない者には底意地の悪いイタズラをしかけて、あげくの果ては暴力をふるう、人の好意を逆手にとってあざ笑う、能力もないのに自らを誇示したがる……

二〇歳の若者として姿を見せる次の第五章では、トムの性格は一人前の大人としてすでに完成されたあとである。だが、前章で描かれた成長期の性格と比べて違いはなにもない。欲しい物は手段を選ばずになんでも手に入れようとして、あげくの

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

果てに盗み、殺人まで犯す。他人への思いやりに欠ける自己中心主義的行動など、すべて第四章で紹介済みの性格が踏襲されるだけである。おしゃれで人当たりがよくて酒とバクチが大好き、といった成人後の特徴的行動も、もともと備わっていた幼い頃の性格を延長しただけのこと。ドーソンズ・ランディングでもっとも恵まれた生活環境を享受できた特権階級の一人たるトムが、家庭や社会の規制を受けることもなく、生まれついたままの性癖を満たした結果である。語り手も伯父ドリスコル判事も言うように、溺愛を受けて甘やかされ、すべてを与えられたトムは、放埒三昧の青年時代を送ったために社会人として通用しなくなってしまった。

ではトムを自己破滅に追いやった、芳しからざる先天的素質は誰のものなのか。作品は多くを語らない。両親の遺伝についてさえ曖昧である。トムがロクサナの人柄を十分に受け継いでいれば、あれほど簡単に身を持ち崩すことはなかっただろう。母性愛の体現者にして自己犠牲の権化たる彼女は、トムがバクチで背負い込んだ借金を自らを犠牲にして返済させようとしたほどだから。仲間の黒人たちからも信頼があつかった。

トムの父はどうか。これもセシル・エッセクスはわずか数行で名前と死亡が語られるだけの存在で、他にはなにもわからぬ。もちろん、家柄を誇り、名誉心旺盛なFFV も女性には弱く、“miscegenation” の汚名をものともせずに、ロクサナとの「愛の営み」に励んだことだけはわかっている。FFV への作家の皮肉な眼差しがうかがえるが、それ以上エセックスがどんな人物だったかは五里霧中。ロクサナの人柄を考えると、だらしないトムの性格は父から譲り受けた要素が多いかもしれぬ。とはいえ父母以外、トムと血のつながった人物は作品には登場しないのだから、トムの血に含まれた遺伝的要素については考えようもなかろう。

要するに、自己抑制がきかないトムの性格をどう遺伝的に説明すべきか、トウェインの姿勢は曖昧で、ロクサナが言うような「黒人の血」で説明できるものでないことはだけは確かである。「黒人の血」が先天的にどのような役割を果たすかを描くことよりも、むしろ社会的に「黒人の血」を持つ（とされる）人間がどのような扱いを受けるか、またトムをめぐって登場人物が「黒人の血」をどう理解している

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

か、ということに作家の関心はある。売り飛ばされる仲間の奴隷たちを見て不安に駆られたロクサナが赤ん坊を取り替える場面（第三章）、支配者対被支配者という社会的関係に寄りかかり、トムが忠実な奴隷チェンバーズを痛めつける場面（第四章）、それになんといっても、ロクサナが彼の正体を暴露する場面（第九章）など、「間抜けのウィルソン」前半部におけるハイライトはおおむねそうなっている。だが、このように奴隷制社会（あるいは新南部）における人種関係をめぐる葛藤を冒頭から扱いながらも、物語はロクサナとトムではなくて、ウィルソンとトムを中心に展開するようになる。黒人たちへの共感の代わりに、双子を窮地に追い落とそうとする、伯父を巻き込んだトムの悪巧みを物語は語るようになる。

「黒人の血」から「真犯人追及」へ

> 自分の性格はかなり根本的に変わってしまった、とこのあと一週間ほどのあいだトムは考えた。だが、それは彼が自分自身を知らなかったからである。
>
> いくつかの点で彼の考えは完全に変わり、もはや前のようには戻らなかったが、彼の性格のおおきな枠組みは変わりもせず、変えようもなかった。性格上のたいそう大事な特徴がひとつ、ふたつ変わり、折にふれて、ずいぶん深刻なものも含めた影響が出てくるかもしれないが。精神的かつ道徳的激変が影響して、彼の性格と習慣は一変したように見えたが、しばらくたって嵐がおさまるにつれ、両方とも以前の状態へ戻りはじめた。じょじょにものの感じ方や話し方も、トムは浅はかで安易な態度に戻っていったのである。彼の親しい仲間でも、昔の弱々しくて不注意なトムとちがっているところなど、なにも気づかなかっただろう。（PW 四五）

自らの血の秘密を知ったトムが、一週間後にどうなっていたかを説明する語り手の言葉である。僅かな援助を求めたロクサナを拒否したトムは、怒り心頭に発した母から思いもよらぬ言葉を口にされ、「なぜ白人と黒んぼではこんなにひどい違いができてるんだ」と悩んだはずである。奴隷制社会における自らの立場を知らされて衝撃を受け、いまや仲間同士となった黒人たちが置かれた立場にたいして思いをめぐらすに至ったはずである。普段あれほどいじめていた本物のトムにたいしても、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

哀れみを示した。彼は確かにこのとき、それまでのトムではなかった。死んでしまいたいと思うほど「黒人の血」について苦しんだ。ところが、それほど大きな衝撃を受けたにもかかわらず、わずかな時間が経つとトムは元の木阿弥に戻った、とされる。同じ章のなかで、わずか二、三ページのうちに語り手自身の解説によって物語のもっとも中核的エピソードのひとつが片づけられてしまう。

トムの受けた衝撃と変化について、語り手が繰り返した大げさな言葉を思い起こすと、彼がこれほどたやすく元に戻ったという物語の展開が、私は腑に落ちない。いわく、一八八三年にインドネシアで火山の大噴火があり、地震や津波があたりの地形を変えたように、トムの「倫理的景観」（“moral landscape”）も以前の姿をとどめぬほど変わったとか、何日も（“for days”）自分の置かれた位置を理解しようと彼はさまよい歩いた、と言ったはずである。動揺したせいで、白人の友人たちにも卑屈な態度をとるし、どこを歩いても白人の顔色をうかがう。自分の血の秘密を彼らが知っているのではないかと気に病んですくむ。食卓でも白人と同席するのが恥ずかしくなり、伯父から「どうしたんだ—黒んぼみたいにおとなしいじゃないか」（PW 四五）とまで問われる。

トムの立ち居振る舞いが変わったのは、じっさいに「黒人の血」が彼の体を流れているからではない。もしそうなら、最初から「奴隷」のように行動したはずである。そうではなくて、流れているのだと気づいてしまったことが原因なのである。アイデンティテイの危機が引き金だったのである。本物のトムをめぐって、「奴隷」とは社会的に訓練され、学習した結果として生まれた行動様式の寄せ集めである、とさきほど言ったはずだが、自らの「黒い血」を意識したトムは奴隷社会が求め、受け入れる奴隷の役を自然に演じてしまった。つまり黒人奴隷という存在は、まわりの白人たちが黒人にたいして抱く、黒人像や意識を映し出す鏡なのである。

それにしても変である。外面の挙措ばかりか、意識のうえでも変わったはずのトムだが、ところがしかし、その直後に実はトムは変わっていなかった、と太鼓判が押される……全能の語り手が地の言葉でそう語った以上、読者はトムは変わらなかったと受け取るしかない。実際、その後のトムの行動は彼がアイデンティテイの

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

危機を軽々と乗り越えたことを証明する。これ以後、物語の主な出来事をたどると、判事とルイージの決闘、川下へのロクサナの売却と彼女の脱出、自分を裏切ったトムへのロクサナの怒り、金を手に入れようとするトムによる伯父の殺害、双子にたいするドリスコル判事殺害嫌疑、ウィルソンの推理、法廷場面となる。要するに、「黒人の血」や黒人たちの置かれた立場、またなぜ両人種はこれほど違うのか、といった疑問をめぐってトムは語る言葉を持ちあわせない。それどころかいかに双子の名誉を傷つけるか、またより多くの金を手に入れるために、いかに母を騙して密かに川下に売り飛ばすか、といったように自らの卑劣さを最高度に発揮する。人種問題は影が薄くなっていく。たまたま黒人をめぐるエピソードが顔を出しても、実の母をまえにしてもロクサナが「黒んぼ」だからトムは尻込みした、といった程度である。「彼自身が黒人であるからといって、彼がこの軽蔑すべき人種とうち解け合うことにはならなかった。」（PW 八〇）

トムの出生をめぐるロクサナの暴露はトムに影響を与えなかったばかりか、作品の流れにも大きな意味を持たなかった。トムは相変わらずバクチに心奪われ、借金返済のために娘や老婆に変装して盗みを重ねる。犯行が発覚するのを恐れながら、そのくせ犯罪者特有の心理でウィルソンの推理を知りたがる。自ら墓穴を掘っているにもかかわらず、ウィルソンをからかう。いっぽうウィルソンも得意の「手相」と「指紋」の知識を披露し、最後はトムの女装や赤ん坊の取り替えという新発見にたどり着く。犯人と刑事の知恵比べさながら、泥棒は誰か、ドリスコル判事殺害犯は誰かという、悪人発見をモチーフとする探偵推理小説としての色彩を物語は強めてゆく。逆に、小説冒頭を中心に展開されていた奴隷制や人種問題といった社会色の強い問題意識は沈潜してゆく。底流にはあっても、表舞台からは影を潜める。最後まで併存しはするが、小説の比重は社会小説から推理小説へとゆるやかに移ってゆく。

序文と「黒人の血」

隔靴掻痒の感がある。「間抜けのウィルソン」は『ハックルベリ・フィンの冒険』

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

と比べ、奴隷制社会を考えるための時代背景や人物設定がいっそう都合よく整っていることは最初に述べた。ドーソンズ・ランディング支配層のトップ近くに君臨する人物が、急転直下ヒエラルキの最下層に転落した。彼は苦しんだ。何日もさまよった。「倫理的景観」に壊滅的打撃を受けた。アイデンティテイの危機を経験した。奴隷制社会の頂点と底辺とを自由に往来可能な、懊悩する主人公の誕生によって、作家は旧南部の基盤制度についていっそう深く、広く考えるための視点を得たはずである。だが、彼は身を翻して方向転換してゆく。トムはもはやドーソンズ・ランディングの社会体制について考えることはない。黒人たちに思いをいたすこともない——これは肩すかしである。自らの立場をくらます、トウェインの韜晦ではないのか。言質（シッポ）をつかまれまいとする逃亡者的姿勢ではないのか。小説冒頭に示された奴隷制や人種をめぐる問題意識が、最後に（わずか数行ではあっても）語られる売却奴隷トムの姿とつながり、ひとつの輪を完成していることは承知のうえでも、やはりこだわりたくなる。

先に論じた『ハックルベリ・フィンの冒険』とおなじパターンが、「間抜けのウィルソン」でも繰り返されている。真剣な社会批判を含みながらも、同時におもしろおかしく馬鹿馬鹿しいフェルプス農場でのトムの冒険に代わって、今度は探偵ウィルソン探偵の活躍が始まり、表面的には娯楽性が押し出される。こうした社会性と娯楽性の力関係は「異形の双子」ではさらに明快となってゆく。だがそれについて考えるまえに、「間抜けのウィルソン」と「異形の双子」の関係をめぐって作家が記した例の「序文」についても触れおこう。

前述したが、一八九二年十二月頃完成した『間抜けのウィルソンと異形の双子』の肉筆原稿は Pierpont Morgan Library に現存するという。これとは別に、ニューヨーク・パブリック・ライブラリ・バーグ・コレクション（Berg Collection）にも一二四ページに及ぶ肉筆原稿が所蔵されている。これはドイツの Bad-Nauheim で、トウェインが物語の執筆を開始したときの（Hershel Parker によれば）もっとも古い冒頭部とされる。*Flawed Texts & Verbal Icons: Literary Authority in American Fiction*（一九八四）のなかで、パーカーはドイツで書き出された原稿を参照しな

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

がら完成肉筆原稿を検討し、執筆進捗状況を追跡する研究を発表して注目された。というのも、作家が語った序文によって提供された「解説」が、事実とは少し異なるらしいことを新たに発見できたからである。パーカーとは立場が異なる Forrest Robinson も彼の仕事を評価しているので、まずは信頼できよう。

そこでトウェインが「異形の双子」序文でしたためた解説である――当初自分はイタリア生まれのシャム双生児をめぐり、「途方もなく突飛な小品」(PW 一一九)を書こうとした。だが、やがてロクサナと偽トムを登場させたことで、関心の中心はこの二人とウィルソンの三人組のほうに移っていった。双子より赤ん坊の取り替え話のほうが自分の想像力を捉えた、というのである。そしてロクサナとトムのおかげで二組の話がごちゃ混ぜになってしまうのを避けるため、双子にまつわる筋展開を「帝王切開」よろしく取り出した、とトウェインはいう。その結果、ロクサナとトムをめぐる悲劇色の強い物語がひとつ誕生した。

いっぽう、ロクサナとトム母子のために舞台外に姿を消した双子と双子をめぐる人びと（特にアンジェロと恋に落ちた娘ロウィーナ）の話を、読者に対する責任として完成させねばならないと感じた作家は、最終的に「悲劇」と抱き合わせるように喜劇色の強い「異形の双子」を完成させた。こうした苦労について「生まれつき小説執筆の才に恵まれない間が小説をまとめようとすると、厄介なことになる。」（*PW* 一一九）というのがトウェインの感想である。

パーカーの調査研究によると、現在分離されている「間抜けのウィルソン」と「異形の双子」は肉筆原稿完成時にはすでにひとつの作品のなかに撚り合わせるように納まっていた、という。だから、ロクサナとトムの話が先行して双子のプロットは置き去りにされ、後になってできあがった、という印象を読者に与える作家自身の解説は（パーカーに従えば）実際の執筆順序とは齟齬をきたすことになる。トムもロクサナも双子（この時点ではシャム双生児）も最初から一定の役割を与えられて存在していたのである。二組の登場人物をめぐって各々の物語は並行的に執筆されており、ロクサナ・トムをめぐって書きだしたのちも、トウェインは同時に双子についても執筆を進めていた、ということである。(Parker 一一九)

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

印刷用タイプ原稿が完成した時点では、ひとつの物語として一冊の本のまま出版できるとトウェインは楽観的に考えていたらしい。ロクサナ・トムをめぐるプロットと双子関連プロット、それに登場人物同士の連関（たとえば双子とロクサナはほとんどつながっていない）などをめぐって、いくつか問題を抱え込んではいたが、トウェインは特に問題を感じなかった。それがなぜ出版できなかったかと言えば、トウェインが出資していた例のチャールズ・エル・ウェブスター出版社の財政が行き詰まり、また本をどのような形で出版するかについて、関係者の足並みが乱れたから（Parker 一一六）、というのが事実に近いとパーカーは結論している。

パーカー論文は微に入り細をうがつので略述はむずかしいが、われわれの関心事たる「黒人の血」をめぐっては興味深い指摘があるので紹介したい。パーカーによれば、当初トムの素性が暴露される最後の法廷場面まで、彼の「血」についてはまったく触れられていなかったのだという。トムはロウィーナの求愛者にして判事のいとこという役柄（Parker 一二三、一二九）で登場し、そのときはミュラトーという設定ではなかった。そうではなくてロウィーナをめぐってアンジェロと恋のさや当てを演じる白人の若者こそがトムの基本的役割だった。法廷場面まで書き終え、トムが実は混血だった、というところまで書いて初めてトウェインは小説冒頭部に戻り、今われわれが手にしている最初の数章を新たに執筆、あるいは加筆し、それらに続く章にも手を加えた、という。（Parker 一二六）

だから、「間抜けのウィルソン」が奴隷制や黒人の血をめぐる社会小説として、現在注目を浴びることになる展開（奴隷としてのロクサナの立場、女主が出産した同じ日にロクサナが我が子を出産したこと、赤ん坊が川下に売り飛ばされるのではないかと心配したロクサナが、我が子を本物のトムと取り替えたことなど）はこのとき簡潔にまとめられた。冒頭の四、五章を中心にトムの生い立ちや少年時代を書き終えると、トウェインはそれに続く章についても手を加えた——自由黒人ロクサナの蒸気船客室係としての成功、貯金預け先銀行破産のためトムを頼ってドーソンズ・ランディングに舞い戻った彼女へのトムの冷酷な仕打ち、怒ったロクサナによるトムの血の秘密暴露、そして生い立ちを知って苦しむトムなどである。（Parker 一二

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

六〜一二七)。だが論じてきたように、一週間ほど悩んだのち、トムは元の木阿弥となるり、バクチであけた穴埋めのために新たな盗みを計画する。ウィルソンに見破られずに盗みを成功させるにはどうすればいいかを思案する――ここまで新たに原稿を書き加えたトウェインは、はじめて当初のプランであった「間抜けのウィルソン」における双子到着場面（第十一章冒頭）に物語を戻してゆく。「こうして長い脱線（“long digression”）のあとに、再びわれわれは同じ金曜日の午後、双子の到着を待つ間抜けのウィルソンが、あの朝のおかしな人影、トム・ドリスコルの寝室にいる若い娘について、いらいらしながら憶測をたくましくて困り果て、あの恥知らずの女は誰だろうと思案しているところに戻ってきた。」（*PW* 四七）黒人の血をめぐって展開した冒頭部以下を「長い脱線」と形容するとは言わずもがなであるが、パーカーによれば、こうしてひとつの物語としてできあがっていった作品は、やがて九三年夏になってから、作家の手で二つの物語に分離されてゆく。（Parker 一三〇）

まとめてみよう。本論に直接関係するパーカー論文のふたつの要点――①現在われわれが手にする「間抜けのウィルソン」の骨格は「異形の双子」と絡まり合いながら、一八九二年冬から翌九三年初頭にかけてトウェインが完成した肉筆原稿のなかで、ひとつの物語としての枠組みにおさめられていた、②ロクサナ・トムを中心に黒人の血をめぐって展開される部分（主に冒頭部）は、物語の大枠がいったんできあがった後になって付け加えられた――をふまえると、先に触れたトムの「謎」をめぐって、ひとつのサジェスチョンが得られよう。つまり、社会性が強く、したがって現在強い関心が払われる奴隷制や黒人の血をめぐる展開は、作家にとってはどちらかというと二義的な意義しか持たなかったのではないか、ということである。あるいは、それらの問題に踏み込みたくても、踏み込まない方が良いのだという判断を作家がしたのではないか、ということである。法廷場面と、それに続いて川下に売られるトムの姿で物語を締めくくることで奴隷制社会への批判は確かに達成される。だが同時に、トムの内面に踏み込まずに、物として売られてゆく彼に一言も喋らせないまま幕を引けば、その批判が大きな広がりを持たないままに終わらせる

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

こともできるではないか——有り体に言えばこれは「マッチポンプ」ではないか。

トウェインの読者は、われわれのように人権意識を身につけた二一世紀の読者ではない。人種問題に敏感に反応するアメリカ文学研究者ではない。セグリゲーションを可とした一九世紀末アメリカの、それもほとんどすべてが白人のアメリカ読者である。ミュラトーをめぐる彼らの意識がどのようなものであったかは、プレッシ裁判に見られたとおりである。慢性的に金銭面で苦境に立つことの多かったトウェインが、本の売れ行きを気にして、読者の感情を逆なですることを避けたかったとしても無理からぬことだろう。元の木阿弥に戻るトムの姿は、社会の流れを察知することにかけては並々ならぬ嗅覚を持っていたトウェインが、いっぽうで保守化の流れに警鐘を鳴らそうとしながらも、他方で社会的反発を避けるために踏み越えてはならぬと彼が感じた一線を守ろうとした妥協の産物だったかもしれないではないか。だからこそ、あれほど易々とトムを元通りのだらしない若者に戻すこともできたし、多くの読者が受け入れやすく、その意味で娯楽色が強まる探偵物語としての要素が前面に押し出されることにもなったのである。

トウェインの曖昧さ

赤ん坊の取り替えに端を発し、黒人の血や奴隷制というモチーフを物語冒頭に新たに設定しておきながら、トウェインは探偵対犯罪者の枠組みへと物語の軸足を移していった。奴隷制社会におけるミュラトーの位置づけに代わって、ウィルソンとトムの知恵比べが主軸となって物語は展開してゆく。頻発する盗みと不思議な女の出没が判事殺害事件とどう絡んでいるかを思案するウィルソンが、無実の双子を救うために奮闘するのを横目に、ほくそ笑みながら挑発し続けるトム——そうした展開をまえにすると、いやでも読者の関心は二人がどう渡り合うかに集まる。

犯人逮捕にいたる物語の過程で作家は、まず基本姿勢として伝統的勧善懲悪主義にたよる。伯父の殺害後、町中から同情を集めて絶対安全圏にまんまと逃げ込んだはずの殺人者の悪事は果たして暴かれるのか、また獄につながれたルイージがいかに冤罪を晴らすのか、社会正義は回復されるのか——読者のこうした自然な疑問に

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

応えるため、ながらく人びとから馬鹿にされてきたウィルソンをトウェインは活用する。

ただし、ウィルソンや彼の行動をどう評価するかは微妙である。等閑視されてきたウィルソンが真犯人を突き止めて衆人環視のなかで喝采を浴びて英雄に祭りあげられ、果ては市長として君臨する姿は、科学知識の威力を理解できなかった愚かなドーソンズ・ランディングへの風刺となっている。しかし同時にまた、債権者がトムをめぐって働く不正への道を開いたとも言えるわけで、ウィルソンが悪しき旧体制の擁護者となってしまったことも否定できない。このように彼の真犯人発見をめぐっては、正義と不義のどちらでも解釈が可能となる設定がなされており、ここでもトウェイン流の韜晦が繰り返される。犯人逮捕をめぐる作家の基本姿勢について、「まずは」と先ほど書いたのは、こうしたトウェインの曖昧さを斟酌したからに他ならない。

ただし再確認すれば、ウィルソンがいなければ、献身的愛情を注いで育ててくれた親を金目当てに殺害した放蕩児トムは相変わらず我が物顔に町を闊歩しただろう。ウィルソンの活躍とトムの逮捕は、だから最終的には勧善懲悪の枠でとらえるべきものであると私は信ずる。トウェインは悪しき体制やそれを支えた価値観への疑問や批判を描き込みつつ、同時にそれらを探偵推理物語のオブラートに包み込む。そして、そのようにクッションを置くことで、多くの人が親しめる非政治的アプローチを用いた「娯楽作家」としての顔をつくりあげ、その背後に身を潜める。ハックが南部をあとにしたのと同じように、安全圏に逃げ込むのである。先の章で論じたケイブルが文学的約束事にしたがって非直接的南部批判を繰り広げるしかなかったように、トウェインもまた解放民問題をめぐり、黒人の血やそこから派生する社会問題には深入りを避ける。明快な言葉では語ろうとしない。変化球で勝負する。それは人種問題をめぐって率直に物を言うことが難しかった時代を人気者として生き延びてゆくための、彼一流の知恵だったのではなかろうか。トウェインのこうした及び腰は「異形の双子」を絡みあわせて考えてみるといっそう明らかになろう。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

パロディ化される「間抜けのウィルソン」

「間抜けのウィルソン」は単独で論じられることが多い。現代アメリカが強い関心をもつ社会問題を扱っているのだから、故なきことではない。こうした傾向に拍車を掛けているのが作家自身の解説だろう。「異形の双子」に付した序文については紹介済みだが、トウェインは作品の終わりに改めて「最後の言葉」（“Final Remarks”）を付し、ふたつの物語の創作過程について再度弁明する——新たにやってきたロクサナ・トム・ウィルソンの三人組を核とする物語が悲劇として成長していったため、双子や当初彼らとかかわった人物は重要性を失って邪魔になった。そこで二つの物語に構成し直した、という序文の繰り返しである。「最後の言葉」で作家は更に補足して、「二つの物語のあいだには何のつながりも、相互依存も、関連もない」（“there was no connection between them, no interdependence, no kinship” *TW* 一七〇）と明言してはばからない。じっさい、「間抜けのウィルソン」はイギリスでは Chatto & Windus から単独出版されたという。（Rasmussen 三七九）だが、アメリカン・パブリッシング・カンパニが一八九四年秋に「間抜けのウィルソン」を上梓したとき、「異形の双子」はトウェインの言う悲劇と抱き合わせとなっていた。その理由は、序文で作家が言うようにアンジェロと恋に落ちたロウィーナやクーパ家の人びとなど、当初登場するはずだった人びとを、よみがえらせるためばかりではなかったろう。

「異形の双子」を作家自身は自嘲的に、「突飛な物語」（*TW* 一六九）だと言う。確かにそのとおりなのだが、だからといって突飛さが自己目的化しているわけではない。突飛さは手段でもある。つまり、「間抜けのウィルソン」の登場人物や、そこで繰り広げられるエピソードをパロディ化することによって、ドーソンズ・ランディングの人びとや習慣、彼らのあり方そのものを笑い飛ばすという目的に「突飛な物語」はうってつけなのである。

パロディ化が徹底しているのはなんと言っても双子の姿だろう。「間抜けのウィルソン」ではふたりはありふれた「双子」という設定で、アンジェロのほうが色白であることを除くと、外観はうり二つである。いささか怪しげだが、自称「イタリ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ア貴族」にして眉目秀麗、優美で格調高い文辞をしたため、上品で洗練された礼儀作法を身につけ、兄弟そろってピアノを連弾しては人びとを魅了する。外国人を見たこともなく、変化に乏しく精彩を欠いたドーソンズ・ランディング住民から見ると、尊敬と羨望の眼差しを一身に受ける栄光ある登場人物である。

いっぽう「異形の双子」の双子はまごうかたなきシャム双生児であり、したがって町の人びとからは「怪物」扱いである。胴体がひとつで足が二本、だが頭は二つに手が四本の「ふたり」の怪異な姿をまえに失神する者まで出る。ルイージが男性的で自尊心が強いのとは対照的に、アンジェロは女性的で沈思黙考型である。性格的にも調和不能なまでにかけ離れた双子は、歩き方やお辞儀、食事の様子など日常動作から思想信条に至るまで、ことごとく読者に混乱や戸惑いと、もちろん笑いを引き起こす。そのなかでも秀逸なのは、ひとつしかない体と二本の足を操る意志が、一週間おきに兄弟のあいだで機械的に移動するという、これまたトウェインらしい奇想天外な設定だろう。「自由人会」（“Sons of Liberty”）で双子に蹴り飛ばされたトムが彼らを告発し、どちらが犯人かを見極め、裁くための法廷が「異形の双子」で開かれる。

悲劇と同じで、この法廷でも主役はウィルソンである。ただし、殺人事件の真犯人捜しというスリリングな役回りに比べると、アンタイ・クライマックスとしか言いようがない。顔と手と人格は二人だが、足は二本しかないシャム双生児が相手である。おまけに足の「持ち主」は一週間ごとに交代する。だから、双子のどちらが犯人なのかと思案しても確認のしようもない。それを大まじめで審議する法廷のばからしさを、ウィルソンは陪審員や判事に納得させる。

人びとが知らない指紋の特質を利用し、衆人環視のまえで真犯人発見に成功する悲劇での活躍と違って、「異形の双子」でのウィルソンはトンチを使って双子を救い出す。だから彼の役割は犯人逮捕から犯人釈放へとユーモラスに逆転している。ドーソンズ・ランディングの愚かさが揶揄されるのは悲劇と変わりないが、同じ裁判とは言っても探偵小説の息詰まるような殺人犯捜しはコメディに変容し、パロディ化完了と相成る。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「間抜けのウィルソン」のパロディ化と言えば、忘れてはならないのはロクサナの赤ん坊取り替えである。「異形の双子」第五章冒頭、全能の語り手は物語の進行に先回りする形でしゃしゃり出て自らの言葉で解説を加える。蒸気船でのロクサナの冒険や、彼女が赤ん坊を取り替えたことについて言及するわけだが、そこではロクサナは「間抜けのウィルソン」での母としての切実な思いを否定されてしまう――“Her exchange of the children had been flippantly and farcically described in an earlier chapter.”（*TW* 一四四）

「彼女（＝ロクシー）が子供たちを取り替えたことは初めの方の章でふざけて馬鹿馬鹿しく書いておいた。」愛しいわが子を救いたいという切実なロクサナの行為を、あたかも語り手自身が冗談扱いし一笑に付している。パロディ化されている。「間抜けのウィルソン」の中心的エピソードの評価を語り手が豹変させていることになる――どう考えるべきなのだろう。「黒人の血」をめぐって冒頭部で展開されるロクサナやトムの言動がどのような経緯で成立したかについては、さきほどのパーカー論文で紹介した。ふたつの物語をひとつの流れのなかに一度は絡み合わせ、トムの正体を暴露する法廷場面を書き終えたのち、はじめてトウェインは「間抜けのウィルソン」冒頭部を書き加えた。奴隷制社会におけるミュラトーの困難な立場を解説したのである。そのような成立過程を経て冒頭部が強調するようになった奴隷制社会と「黒人の血」をめぐる展開こそが、現代読者をしてこれほど「間抜けのウィルソン」をめぐる活発な論議を引き起こしてきた。ところがトウェインは「異形の双子」では、あれは冗談でした、本気にとる必要はないのです、と言う。要するに「異形の双子」が「間抜けのウィルソン」が提起した人種問題、血の問題を矮小化している、ということである。探偵小説が社会小説の要素を凌駕していった「間抜けのウィルソン」のパターンがここでも繰り返される。

「異形の双子」第五章はトムがルイージに蹴っ飛ばされた翌朝であると語り手は言う。だから、時間の流れから言うと「間抜けのウィルソン」十一章に直接続くことになる。ノートン版のようにふたつの物語が一冊に収められた版を読む読者にすれば、こうした説明のおかげで双方の物語の展開は重なり合ったり、もつれあう

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

結果となる。相互に関連がないと言っておきながら、関連がないどころか「異形の双子」は「間抜けのウィルソン」の物語展開を脇道に誘導することになっている。ノートン版第一章冒頭で “The Suppressed Farce” とわざわざ明示された「異形の双子」は、この物語をよみがえらせた語り手によって、いったん悲劇として完了した「間抜けのウィルソン」を揺さぶり混乱させてしまうのである。こうしてマッチポンプと韜晦の繰り返しによって、「異形の双子」は「間抜けのウィルソン」を南部特有の問題から遠ざける。いわば脱南部化してゆくわけだが、今度はこのことを「法の正義」をめぐって考えておきたい。

「法の正義」と脱南部化

「間抜けのウィルソン」におけるトムの売却と「異形の双子」での双子のリンチは、ともに「法の正義」を踏みにじる行為である。いったん確立された「法の正義」が破られるというパターンがふたつの物語に共通してみられる。「間抜けのウィルソン」における「法の正義」とは、繰り返せばウィルソンが真犯人の罪をあばいたことである。トムが逮捕された法廷場面で、探偵小説が大団円を迎えるために必要な勧善懲悪がいったんは実現される。甥を溺愛したドリスコル判事はそのために命を落としたが、ウィルソンのおかげで犯人は逮捕され、奴隷制社会とはいえ共同体の秩序は回復された。こうして「法の正義」をいちどは確立させたトウェインは、しかし最後に、トムが物として川下に売り飛ばされる姿を紹介することによって共同体の基盤たる法体系無視、論理のすり替え、そして法律そのものに潜んでいた倫理的錯誤までをも浮上させることになった。既に書いたとおりである。

今度は「異形の双子」である。実はここでも、一度は守られた法秩序が最後にふたたび破られるというパターンが繰り返される。ただし、一度は守られた法秩序とはいっても、それは奴隷制社会のものではなく、「異形の双子」にあっては良識が支配する近代社会の秩序である。うえで触れたが、双子を無罪放免にせざるを得なかった法廷の勝利者はウィルソンの知恵であり、理性に支えられた当意即妙の反論だった。証言がいちように抱え込む基本的な不備を指摘し、犯人追及の不可能を悟

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

らせたのは、疑わしきは罰さずという被告の権利を守る、ウィルソンの弁護士としての能力だったのである。

双子を釈放する際、ロビンソン判事は彼の言う「法廷の正義」が敗れたのを嘆き、被告を保護する法律をそしる。

> この犯罪から私は手を引く。私ならこの犯罪者たちに自らの罪を暴かせただろう、だが助けと激励を私が期待して当然の権利があるときに後押しはなかった。犯罪のためにつくられた法律が私のまえに立ちはだかった、犯罪者が自分に不利な証言はしなくていいという法律だ。だが、その法律を過去に二度ばかり無視して私は、犯罪者をかれら以外には証人がいない犯罪で有罪とした前例があった。
>
> （*PW* 一五四）

犯罪者にも権利があるから、その権利は守られねばならないとする近代的人権思想に基づいた法律感覚と、自白のみが証拠だとする前近代的自白第一主義とが対比されている。新旧二つの法の精神を、ウィルソンと判事は語っていることになる。古めかしいロビンソン判事の考え方が法廷を制していれば、物語はずいぶん違った展開を見せただろうが、証人が次々と論破されては、判事もウィルソンの勝利を認めざるをえない。ウィルソンを祝福する人びとの姿は、そのまま「法の正義」をめぐる新旧思想の力関係が逆転したことを語る。

こうして近代的な「法の正義」がいったん打ち立てられはするが、最後にリンチが双子を殺す。市議選で当選したルイージは、アンジェロがいっしょなので議会に入場を認められない。市議会は飲酒派と禁酒派の膠着状態が続き、飲酒派はルイージを入れたがるが、裁判所は認めない。上告費用が負担しきれなくなり、あげくの果てはルイージの首に縄を掛けてひと思いに解決、という次第。ドタバタ悲劇とでも呼ぶべきこのリンチは、疑わしきは罰せずという、ウィルソンの良識の勝利を覆す暴挙であり、「法の正義」をドーソンズ・ランディングが自らが踏みにじったことを意味する。

いっぽうは被告に有利な近代的「法の正義」、他方は奴隷制社会の「法の正義」と

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いう違いはある。だが、ふたつの「法の正義」は「異形の双子」と「間抜けのウィルソン」のなかでそれぞれ破られる。烏合の衆と化した共同体が法の正義を無視する。いかにもトウェインらしい社会批判ではある。ただし注意すべきは、同じように法の正義が破られたといっても、黒人の血や奴隷制の問題が姿を潜めてしまった「異形の双子」にあっては、リンチの舞台は南部である必要はないということだろう。近代的法秩序を暴力によって覆すというのは、別に南部特有の現象とも言えず、荒々しい暮らしぶりが一般的だった西部でも珍しくはなかっただろう。確かに一八九〇年代には南部では黒人へのリンチが横行するようになり、トウェインは南部ばかりか、アメリカ全体に黒人へのリンチが広がってゆくことを “fashion”（“The United States of Lyncherdom” 一九〇一年）と呼んで嘆き恐れた。だが「異形の双子」の犠牲者は黒人ではなくて外国人である。南部色は薄くなっている。

脱南部化と言えば、「異形の双子」の決闘場面についても最後に付け加えておこう。「間抜けのウィルソン」でドリスコル判事はFFVの名誉を賭けてルイージと決闘する。判事にすれば、まさに南部紳士の名誉がかかった決闘である。興味深いのは、この決闘では対決そのものよりも、決闘にいたるまでの関係者の言動が丁寧に紹介されることである。人びとの眼前で辱められたにもかかわらず、決闘ではなくて裁判にトムが訴えたことにたいし、判事もロクサナもトムの臆病さを慨嘆したことが強調された。彼らが南部人としてどんな反応を示したかが語り手の関心事なのである。だから「間抜けのウィルソン」は主に決闘をめぐる心理ドラマとしての色合いが強い。

いっぽう「異形の双子」は決闘の現場描写に力点が置かれている。いよいよ撃ちあうというときになると、十二時の鐘が鳴る。すると足を支配する意志がルイージからアンジェロに移り、平和主義者たるアンジェロは現場から逃げ出す。おかげで怪我をしたのは当事者の二人ではなく、現場にいあわせた介添人や見物人ばかり。あげくの果て、ウィルソンまでルイージの弾であごをケガする――決闘をめぐっても「異形の双子」は「間抜けのウィルソン」をパロディ化している。脱南部化しているのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

＊＊＊＊

『間抜けのウィルソンの悲劇と喜劇あの異形の双子』は、作品発表の時代たる一九世紀末を生きたアメリカ作家が南部の問題を描く際の歯切れの悪さ、あるいはそのように描かざるを得ない立場に置かれた、アメリカ社会における彼らの居心地の悪さを感じさせる。ふたつを一冊の本としてトウェインが世に送り出したのは、プレッシ対ファーガソン裁判に見られるような当時の保守的な社会がもつ体質への配慮が与っていたのだろう。川下に売られた外観は白人たるトムとリンチで果てた双子は、ともに社会派作家としてのトウェインの顔をのぞかせはする。奴隷制社会ドーソンズ・ランディングの残忍さと愚かさは、むろん作家の批判を浴びるし風刺の対象である。だが、奴隷制社会の恐ろしさを語ったあとで、彼はその恐ろしさを否定はしないまでも弱めようとする。「喜劇あの異形の双子」とからませることで、悲劇的トーンを希薄化しようとする。「異形の双子」を読み終えたあとでは、恐ろしい奴隷制社会としてのドーソンズ・ランディングの姿は弱まりこそすれ、強まることはない。新旧両南部を知り抜いた作家は、南部のもっともデリケートな問題をいったんは読者に突きつけながらも、やがて自分を韜晦する。急進的になりがちな自らの立場を押しとどめ、時代の流れに沿った安全な枠のなかに退き、私は「素人作家」（“the jack-leg”）なのです、と笑いながら頭をかくのである。

引用参考文献

Berger, Sidney E. ed. *Pudd'nhead Wilson & Those Extraordinary Twins.* NY: W.W. Norton & Company, 1980.

Fitzhugh, George. *Sociology for the South Or the Failure of Free Society: Electronic Edition.* (Documenting the American South, or, The Southern Experience in 19th-century America) Chapel Hil: University of North Carolina, 1998.

Gillman, Susan, and Forest G. Robinson eds. *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture.* Durham: Duke UP., 1990.

Howe, Lawrence. *Mark Twain and the Novel: The Double-Cross of Authenticity.* NY: Cambridge UP., 1998.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Ladd, Barbara. *Nationalism and the Color Line in George Washington Cable, Mark Twain, and William Faulkner.* Baton Rouge: LSU Press, 1996.

Parker, Hershel. *Flawed Texts and Verbal Icons: Literary Authority in American Fiction.* New York: Northwestern UP., 1984.

Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain A to Z: The Essential Reference to His Life and Writings.* NY: Facts On File, Inc., 1995.

Williamson, Joel. *New People: Miscegenation and Mulattoes in the United States.* Baton Rouge: Louisiana State UP., 1980.

——————— *The Crucible of Race: Black-White Relations in the American South Since Emancipation.* NY: Oxford UP., 1984.

NII-Electronic Library Service